2022年（令和4年）
第34号
（7月15日）

平安だより

HEIAN letter

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　田中規之
編集委員長：渉外広報　植田恭司
〒605-0041　京都市東山区三条東町 230
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

第 67 回かめおかこころ塾　～ちむ　どんどんする生き方とは～

第 67 回かめおかこころ塾（かめおか宗教懇話会主催）が７月９日、ガレリアかめおかで開催され、当懇話会副会長の中村憲一郎氏が講演を行いました。

会場となった２階の大広間にはソーシャルディスタンスを保ちながらも約 80 名の参加者がありました。講演の前には、立正佼成会京都教会会員によるバンド、ロス・ダーナスが南米アンデス地方の曲を３曲披露。途中、楽器の紹介も織り交ぜながら終始和やかな雰囲気で会場からは笑いもあがりました。

中村氏は講演のはじめに、ロス・ダーナスのリーダーが脳梗塞に倒れ、その後復帰し現在に至るまでを報告。すべて神仏のご守護であることを述べると、会場からは大きな拍手が送られました。

今回、中村氏は「ちむ　どんどんする生き方とは　～パラリンピックの父・ルードヴィヒ・グッドマン伯爵に学ぶ～」と題し、約 90 分間の講演を行いました。「ちむ　どんどん」とは沖縄の方言で、「胸がわくわくする気持ち」であると解説。子供の頃は遠足や運動会の前日や逆上がりが出来た時など、些細なことでもわくわくする気持ちを持っていたものの、大人になると発見できなくなってきているとし、しかし、本来は毎日が新しい一日であると述べました。

現代ではコロナ禍で先が見えない恐怖といら立ちや、物価高・経済不安・人口減少・年金減少などの先行きへの不安など、良いことが何もないように見える

社会であると説明。そのような中でこそ、パラリンピックの父であるルードヴィヒ・グッドマン伯爵が述べた「失ったものは数えるな。残されたものを最大限に生かせ」の精神が大切だと紹介し、私たちは「ないもの」を見てしまう癖があるが、ないものは最初からないものだと認識し、それは「足るを生きる」「今を生きる」ことだと解説しました。これらは仏教の見方、考え方から発していると述べ、コップの水の譬えを紹介しました。コップに半分水が入っているという事実だけを通し、①半分しか入っていないという否定的な見方から不足、不満、愚痴が生じること、②半分も入っているという肯定的な見方から嬉しい、幸せが生じること、③誰かがコップに半分水を残しておいてくれたという見方から感謝の念、ありがたさが生じると述べました。

また、仏教の縁起の教えを通し、コロナ禍を人間同士のつながりの大切さを実感したり、これまで当たり前だと思っていたことが有り難いことだったと知るきっかけにもなったと見ることが出来ることや、世界情勢を通し、日本は「和を以て貴しと為す」という国であることから世界の和を目指すリーダーは日本でありたいと語りました。

最後に庭野日鑛会長や庭野光祥次代会長の法話を紹介しながら、利他の精神、慈悲の実践の大切さを述べ、それを通して「ちむ　どんどん（胸がわくわくする気持ち）」になって頂きたいと結びました。